

# 何よりもはつきりした話しかたを

— 幼児と言葉について —

文部省學校教育局國語課長

釘 本 久 春

## I

小學校へはいる前の幼い子供さんを持つたおかあさんがたから、私は、よくこういうお話を聞きます。

— うちの子供は、もう來年は學校だというのに、ちつとも、字をおぼえようとはしたがりません。學校へはいつたら、こまりはしないかと、心配です。 —

とか、

— となりのおじようちやんは、とてもおりこうです。幼稚園にもはいつていないのに、もう、ひらがなを、自由に書けるのです。 —

とか、

— 私の友だちの子供に、とても大したぼうやです。まだ小學校にはいっていませんのに、漢字で姓名が書けるのです。 —

というような心配やら、賞讃やお話です。要するに、幼い子供さんの教育に熱心なおかあさんがたが、文字をどうして教えこんだらよいかと心配してお話です。あるいは、文字と言葉とを區別して考えずに、言葉のしつけをどうしようかと考えての心配です。

私は、こういうお話を聞き、ご相談を受けるたびに、こうお答えするのを常としています。それは、

— 字をおぼえさせることは、小學校へはいつてからでよいでしょう。それからで、遅いはずはありません。それよりも、はきはきと話ができるように、言葉づかいの指導にほねをおつていただく必要があると思います。 —

## II

もちろん、文字に興味を持っていて、どん／＼おぼえてい

子供には、それを押さえる必要はありません。しかし、こういう子供にも、言葉づかい、話のしかたを、はつきりとさせるように導くことは、非常にたいせつです。

子供たちが、學校へはいつて組織立つだ勉強をするのにつけて、何よりもたいせつなことは、先生や友だちの話をよく聞きわけ、人にわかるように、はつきりした言葉で自分のことを話すことができるということです。

これは、まことに平凡な、きまりきつたことです。何でもなくできることがらのようでもあります。何も、わざわざ家庭で指導にほねをおるまでのごとではないと、お考えになるおかあさんがたもあるでしょう。

ところで、このことは、果してたやすいことでしょうか。かくべつ指導する必要のないことでしょうか。

新しい一年生の子供たち、いや小學一年生ばかりにかぎりません。中學生にも、新制高校の生徒にも、よくこういう例があることも、私は見るのです。ひよつとすると、それは、大學生についても、さらには一人前のおとなについても、経験させられることのある例です。それは、

「人に物事を聞かれて、返事回答さえ、はつきりできな  
5。」

とか、

「自分の考えや、用事を、人にはつきりと話すことが  
きな5。」

とかいう例です。

小學一年生の場合、はき／＼返答ができないために、先生が教育に當つてどれほど苦勞されるかを感ぜずにはいられません。また、もつと大きい少年少女たち、あるいはおとなの場合でも、自分の考えや用件をはつきりと、人によくわかるように話すことができないために、いろ／＼時間や神經のむだや、不都合が起りやすいことを感ぜずにはいられません。はき／＼と、人にわかりやすいように、話をする能力をつける、習慣を持たせる。こういう指導は、決してたやすいことではないと思います。

### III

もちろん、はき／＼とした話しかたという教育も、文字づかいの指導と同じように、學校でじゆうぶんに努めるべきことです。家庭の教育だけでできあがるわけにはいかないと言えます。

そして、こういう指導が、學校の國語の教育では、これまでに、どうも轉んぜられていたのです。これからは、學校でも大いに力を入れるべきことです。

しかし、こういう話しかたの指導については、決して學校教育の力を買いかぶるわけにはいけません。どうしても、家庭での指導の力に頼る部分が、非常に多くなるはずだと思えます。

はつきりと言葉を話す能力と習慣を、できるだけ早くからつけようと、おかあさんがたが努めてくださることが、どう

しても必要であり、それが最も力強い指導だと思えます。

#### IV

これまで日本の社會では、あまりに文字の知識を大事にしすぎ、話のしかたのほうを粗末にしすぎて來ました。言葉の教育といへば、即ち文字をおぼえること、というふうな考えが力を持つていたのも、つまりは、文字尊重にかたより、話す言葉の重要さに注意しなかつた社會風習のためであります。おかあさんがたが、文字の指導に氣を使つておられるのも、無理のないことと言えましよう。

けれども、こういう習慣は、次第に改められていくことと思ひますし、現に、改まりつゝあります。私たちが、文字を書いたり讀んだりすると同時に、言葉を話したり聞いたりすることが、一日の中どのくらい多いか、それを考えてみたら、だれにでも合點のいくことなのですから。文章を書けばうまいが、話と來たら、全くできないというふうなことは、片手落ちの教育であり、社會活動の上で片輪なことにならぬのですから。

子供たちのためにも、また日本に新しい社會を作るためにも、幼いうちから、話のしかた、話す場合の言葉づかひに、ゆきとどいた指導を受けられるようでありたいと、私は切に願つてます。

何よりも、はつきりと、人にわかるように話す能力と習慣

とを養ふこと。

これは、少年青年成年を通じて、一生私どもの努めるべきことでもありましよう。なか／＼すぐに満足のできるようにはならないこともありましよう。文字を使つて文章を書くことが、なか／＼たやすいことでないのと同じように、これも、なか／＼これでいゝといふまでにはいかないことでもありましよう。

が、とにかく、幼い時から、小學校へはいる前から、この指導、――

何よりも、はつきりした話しかたを！

という指導は、家庭でも幼稚園でも、ぜひ行われなければならぬことだと思ひます。――一九四八・八・一八――

### 第一回日本保育學會研究發表會予告

日時 十一月二十一日(日曜日) 午前九時より

會場 東京女子高等師範學校附屬幼稚園

次第 研究發表。(午前九時から午後二時まで)

シンポジウム。(午後二時から午後四時まで)

出席申込

十一月十五日までに、港區麻布盛岡町一の五愛育研究所教養部内日本保育學會準備掛宛。

昭和二十三年九月 日本保育學會

幼稚園、保育所、の先生方も多數御來聴下さい。  
來聴無料。